

特集：茨城県 県北地域の漆産業の動向

—全国第2位の漆産地における生産・漆芸の現状と展望—

株式会社常陽産業研究所 地域研究センター センター長 荒澤 俊彦
研究員 中橋 彩乃

漆（うるし）はウルシノキの樹液を原料とする天然塗料で、日本では縄文時代から利用されてきた。漆器などの工芸品（漆芸品[※]）や文化財の保存修理に欠かせない一方、生活様式の変化により国内消費は減少しており、生産量も1960年代の約2万kgから近年は2,000kg前後まで縮小している。

こうした中、文化庁が文化財修理に原則国産漆を用いる方針を示したことで、国産漆への需要と増産への期待が高まっている。茨城県は有数の漆生産地とされるが、生産や担い手確保の現状はどうであろうか。

本稿では、国産漆をめぐる全国動向と県北地域の生産状況を公表データから整理し、生産現場や漆芸分野へのヒアリングを通じて、県北地域の漆産業の課題と今後の展望を考察する。

※天然漆を用いて器や装飾品を美しく仕上げた日本独自の伝統工芸品

1. 国産漆を取り巻く環境

(1) 国産漆の生産量と需給動向

農林水産省「特用林産基礎資料」によると、漆の国内消費量は1980年（昭和55年）の約450tから2024年には約31tへと、長期的に大幅な減少を続けている。漆器産業の縮小や生活様式の変化が主な要因とみられる。

国産漆（生うるし）の生産量も、同期間に6,625kgから1,792kgへと約7割減少している（図表1）。ただし、2014年の1,003kg（統計上の最低値）を底に回復傾向がみられ、2020年には2,051kgに達した後、2024年は1,792kgとなっている。

国産漆の増産が進んだ背景には、文化庁の方針転換

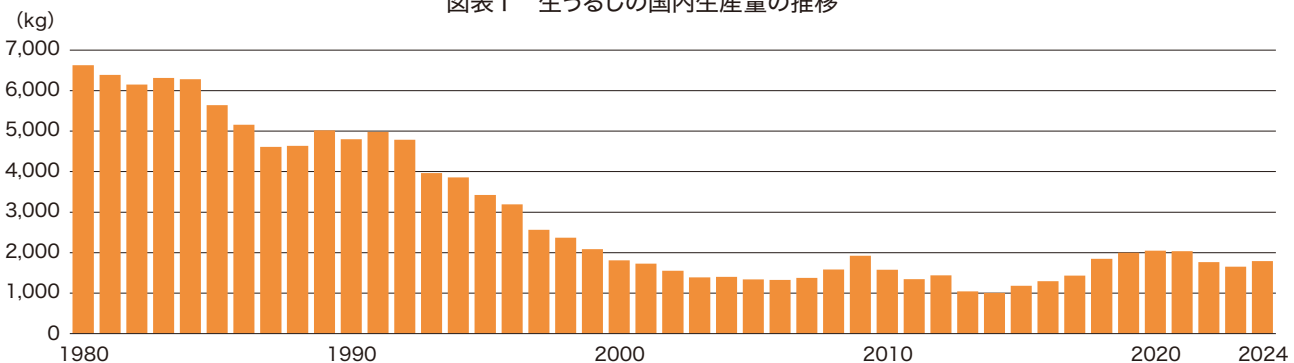
がある。2015年2月、文化庁は国宝・重要文化財の保存修理に使用する漆を原則として国産とする方針を都道府県教育委員会に通知した。

それ以前は、国産漆の単価が中国産の7～8倍と高額であったことから、中国産・国産の混合使用が長年続けられていた。この方針転換により、文化財修理用の需要が国産漆の安定的な引き合いとなり、各産地での植栽・増産の動きにつながったと考えられる。

(2) 漆生産を支える政策的枠組み

国産漆の生産振興に関しては、文化庁と林野庁がそれぞれの立場から施策を展開している。文化庁は2006

図表1 生うるしの国内生産量の推移



出所：特用林産物生産統計調査

年度から「ふるさと文化財の森」システム推進事業を実施し、漆原木林を含む文化財修理用資材の供給林を設定するとともに、漆掻き（ウルシの木に傷をつけ漆を採ること）の技術研修や普及啓発を通じた担い手育成を進めている。林野庁は特用林産物の振興策として漆林の造成や植栽適地に関する情報提供を行うほか、森林・山村多面的機能発揮対策交付金等を活用した地域主体の植栽活動を支援している。

こうした政策的な後押しを背景に、各産地では漆の新植や担い手育成の取り組みが進められている。

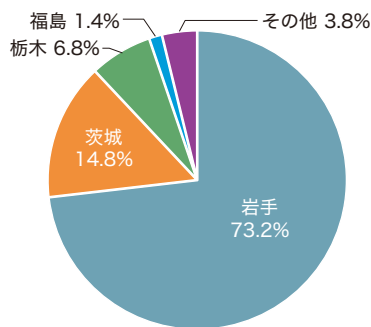
2. 茨城県県北地域の漆生産の現状

(1) 全国第2位の漆産地

都道府県別の漆（生うるし）生産量をみると、岩手県が全国生産量の約7割を占め圧倒的な首位にある（図表2）。また、茨城県は2005年から2024年までの累計で4,603kgと全国第2位の産地であり、第3位の栃木県（同2,104kg）を大きく上回っている。

茨城県の年次別生産量の推移をみると、2005年の

図表2 生うるしの都道府県別シェア(2005～24年累計)



出所：特用林産物生産統計調査

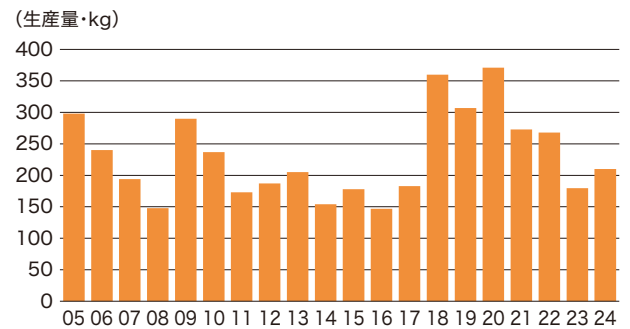
298kgから2020年には371kgへと増加傾向を示した後、2023年は180kgに減少し、2024年は210kgとなった（図表3）。気象条件による収量の年次変動が大きいことが特徴の一つであり、高温多雨の年には漆掻き作業が進みにくいといった影響も指摘されている。

(2) 県北地域の漆の特徴

県北地域で採取される漆は、産地や生産者によって、「大子漆」、「奥久慈漆」など複数の呼称で呼ばれている。これらに共通する特徴として、透明感（「透け」と呼ばれる）に優れ、漆器の仕上げ工程である呂色（ろいろ）塗りに適しているとされる。使い込むほどに透けが増し、経年で美しさが向上する点は、プロの漆芸作家からも高い評価を得ている。

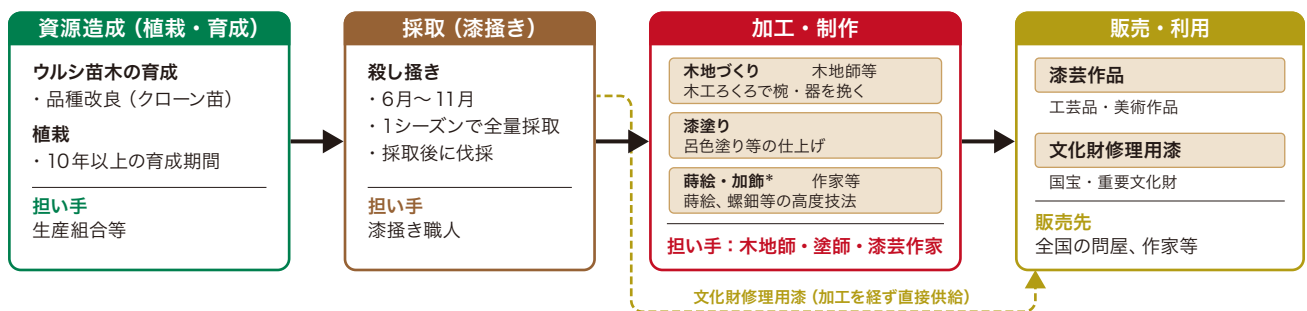
ヒアリング等によると、県北地域の漆の生産・販売等の流れは図表4の通りとなっている。このうち、生産方法の面では、「殺し掻き（ころしかき）」と呼ばれる手法が主流である。約10年かけて育てた漆の木から、1シーズン（6月～11月初旬）で漆液を全量採取し、

図表3 茨城県の生うるし生産量の推移



出所：特用林産物生産統計調査

図表4 県北地域の漆の生産・販売等の流れ



政策支援：文化庁／林野庁／県・市などの自治体

- ・木地(きじ)：漆を塗る前の素地となる木製の器体。木工ろくろで椀や盆などの形に削り出したもの
- ・蒔絵(まきえ)：漆で模様を描き、金粉・銀粉を蒔いて定着させる日本固有の装飾技法
- ・螺鈿(らでん)：アワビや夜光貝などの貝殻片を漆面に嵌め込み、虹色の光沢で文様を表す加飾技法

ヒアリング等をもとに JIR 作成

その後伐採する方法である。岩手県と比較すると、県北地域は11月まで作業が可能であるなど、生産期間

が長いという気候上の優位性があるとされる。また近年は品種改良の取り組みも進んでいる。

3. 県北地域の漆生産の現場から —奥久慈漆生産組合 神長正則氏に聞く

県北地域の漆生産の実態を把握するため、奥久慈漆生産組合の実質的な中心人物として、植栽管理・苗木育成・品種改良研究などを幅広く担っている神長正則氏（常陸大宮市在住）に伺った。



写真提供：NPO法人 杏木呂の会

奥久慈漆の歴史と組織

茨城県における漆の歴史は古く、水戸黄門で知られる水戸光圀の時代に、那珂川・久慈川沿いを中心に漆の植栽が進んだとされています。漆掻きの技術は、その後、福井県の職人を招き、その技を学んだと伝えられています。

現在の奥久慈漆に関する組織体制ですが、まず漆の植栽・保育管理・漆掻き・販売までを担う中核組織として「奥久慈漆生産組合」があります。その上部団体として「奥久慈うるし振興会」があり、そのもとで、木地を制作する「優巧会」、漆塗りを学ぶ「YUS（山方漆ソサエティー）」、そして漆芸作家の集まりである「NPO法人 杏木呂（いちきろ）の会」が活動しています。生産から木地づくり、塗りまでが一つの地域に揃っていることが、この地域の漆産業の大きな強みです。

生産体制と品種改良

現在、常陸大宮市内では、約2万本もの漆（ウルシ）の木が植栽されています。組合員数は約15名で、県内だ

けでなく、福島・群馬・埼玉にも組合員が在籍しています。

岩手県は量を優先した実生中心のアプローチを取っていますが、私たちの組合は、全体の8～9割以上を「高い漆液量を出す優良個体」で揃えることを目指しています。1本の木から採れる漆液の量は、従来は150～200gが標準でした。しかし優良個体を選抜し、育成してきた結果、現在では約400g採れる木も増えてきました。当地域の漆は、質の面では少し先行している部分もあると考えています。

販路と市場環境

生産組合の主な販売先は、NPO法人「杏木呂の会」に所属する漆芸作家のほか、漆問屋さんや全国各地の個人作家の方々です。こだわりを持つ作家からは、「誰が漆を掻いたのか」、「いつの時期に採取された漆なのか」など、漆掻きの担当者名や採取時期を指定した注文が入ることもあります。

需要は常に供給を上回っており、毎年ほぼ売り切れの状態が続いています。そのため、供給面の制約が大きな課題になっています。

後継者問題と今後の展望

組合員の年齢構成は主に50～70代で、最高齢は84歳と、高齢化が進んでいるのが現状です。一方で、群馬県出身の20代の若者が研修生として参加しています。研修生は、漆掻き・木地づくり・塗りまで一通り学んでおり、新たな担い手の芽として期待しています。

後継者・担い手不足、経済性の問題など様々な課題はありますが、私は「奥久慈の漆の先行きは決して暗くない」と感じています。市内では、品種改良やクローン苗の普及によって、1本あたりの採取量をさらに高めていく取り組みが進んでいます。加えて、国際的な発信力を持つ漆芸作家が県北地域に定住しつつあり、産地としてのブランド力向上も期待できます。

当組合では、今後も、質の高い国産漆の産地として、持続的な体制づくりを進めていきたいと考えています。



写真提供：NPO 法人 杏木呂の会

4. 漆を価値あるものに進化させる —漆芸家 室瀬祐氏に聞く

首都圏を拠点に作品制作、研究活動を行ってきた漆芸家・室瀬祐（むろせ・たすく）氏は、2023年6月、家族とともに茨城県常陸大宮市の山間部・諸沢地区へ移住し、「工房 山のは」を開設した。重要無形文化財保持者（人間国宝）である室瀬和美氏を父に、祖父・兄も漆芸家という若手作家は、なぜ奥久慈の地を選んだのだろうか。移住の経緯とともに、国産漆を取り巻く現状や奥久慈産漆の可能性などについて伺った。

移住の背景と奥久慈との関わり

奥久慈との最初の接点は、周囲の人たちから「良い漆は岩手（浄法寺）だけでなく、茨城・奥久慈にもあるよ」と繰り返し聞かされていたことにさかのぼります。実際に現地を訪ね、漆を購入して仕事に使うなかで、その透明感や艶、硬化具合、調合のしやすさに感銘を受けました。奥久慈漆関係者の方々の熱意とあたたかさにも触れ、いつかはもっと深く関わりたい場所として、心の中にずっと残っていました。

移住の背景には、国産漆をめぐる環境の急激な変化もあります。近年、文化財修理の現場では国産漆を使うことが強く求められるようになりました。一方で、文化財修理で必要とされる量と実際の国内生産量にはギャップがあります。「このままでは作品制作に使える漆が足りなくなってしまうのではないか」という危機感が、現場では高まっています。

そうした状況を踏まえ、「一次生産の現場を自分の生活圏に置き、その変化や課題を肌で感じながら制作と研究を行うべきではないか」と考えるようになりました。漆という原材料が生まれる場所により近いところで仕事をしたい。それが、奥久慈への移住を決断した大きな理由です。

国産漆・文化財修理を取り巻く現状認識

国産漆、なかでも奥久慈の漆は、温度や湿度など微妙な環境の違いによって硬化速度が繊細に変化します。中国産の漆に比べ、日本の気候・風土との相性も良いと感じています。私が主な技法として取り組む蒔絵の現場では、こうした性質が表現の精度を大きく左右します。

国は国産漆の増産に向けて、漆掻き職人の育成を支援するなど、一定の施策を講じてきました。

一方で、漆掻き職人の数や漆（樹液）の収量を増やすことに注力するあまり、資源の枯渇が懸念される現場が出てきているという問題もあります。

漆の木は育つのに10～15年かかり、一度「殺し掻き」をすると切り倒されてしまうため、短期間で資源を回復することはできません。「漆掻き職人を増やす」とことと「漆の木を増やす」ことをどう両立させていくか。この点は、今後の漆産業支援の制度設計を考えるうえでの課題だと思います。

奥久慈産漆の特徴、産地の体制と人材

奥久慈の産地としての大きな特徴は、苗木づくりから木の育成、漆掻き、木地、塗り、加飾といった一連の工程、いわば「川上から川下まで」が一つの地域のなかでほぼ完結し得る点にあります。これは全国的に見ても非常に稀有なことです。

奥久慈漆生産組合の取り組みにより、奥久慈はすでに全国的な漆（樹液）の生産地、および苗木の供給拠点として機能しつつあります。また、漆を塗る木地作りを中心に行う「優巧会」など、木工ろくろを使って椀や器を挽く木地師もいます。木から器を削り出せる人がこの地域内にいるというのは、「奇跡的」と言ってもいい状況です。

さらに、「YUS（山方漆ソサエティー）」や個人作家が漆塗りの技術を高めあい、私のように蒔絵や螺鈿（らでん）などの加飾を行う者もいます。

多くの産地では、漆は別の地域から仕入れ、木地も外部に発注するなど、どこかの工程が外部依存になっているケースが一般的です。それに対して奥久慈では、将来的に植栽から作品制作までを地域内で完結し得る体制が実現することで、「ここでしかできない仕事」が生まれつつあると感じています。この完結性は、今後の産地戦略を考えるうえでも大きな強みになるはずです。

作家として大切にしていること

作品制作の現場では、日本の長い歴史が育んできた素材や技術を大切にしながら、現在に生きる我々の感覚でどう表現するか、ということ意識しています。



撮影：久富健太郎



築約150年の民家を譲り受け
開いた「工房 山のは」
撮影：倉本あかり



撮影：倉本あかり

写真提供：室瀬祐

麻の布を何層にも重ねて形を作る乾漆、漆下地による細部の造形、髹漆（きゅうしつ・漆を塗ること）、蒔絵、艶上げ（つやあげ）に至るまで、普段は見えない部分を含めた何十工程もの積み重ねの精度が、最終的な作品の説得力を大きく左右します。

研出蒔絵（とぎだしまきえ）、平蒔絵（ひらまきえ）、高蒔絵（たかまきえ）といった蒔絵の基本的な三技法に加えて、螺鈿（らでん）や卵殻など多様な材料を複雑に組み合わせることで、光を感じさせるような美しく奥行きのある表現を探求しています。

地域との共創

私が暮らしている諸沢地区は、人口減少と高齢化が進む山間地域ですが、「この土地をどう良くしていこうか」と真剣に考える人たちが身近にいる点が大きな魅力です。

地域との共創の一環として、廃校近くの耕作放棄地を活用し、仲間たちと漆の苗を植える漆畑づくりにも着手しました。諸沢地区はかつて多くの職人が漆掻きをしていた場所であり、自宅兼工房である古民家の元家主さんからは「夏の朝に、ヘラで掬い取った漆を容器に移す『トントントン』という音で目が覚めた記憶がある」と伺ったことがあります。そうした風景を、この場所に再び呼び戻したいと願っています。

これからの漆産業に求められる視点

漆芸の世界では、「素材・道具・人材」という三つの側面から、将来への危機感が強まっています。また奥久慈では、植栽から漆掻きまでを同じ人が担うケースが多く、漆掻きのピークと草刈りのピークが重なることで畑の管理が手薄になり「木を増やしながらかき掻く」ことの両立が難しくなっているのが現実です。

このため、今後は「漆という樹液（素材）をどう経済に結びつけていくか」という視点が重要と考えています。漆そのものの単価にはどうしても限界があり、現状では漆掻きだけで安定した生活を営むのは非常に難しい状況です。器や工芸品、美術作品といった形にまで価値を高め、その価値が社会的に認められることで、「漆」という素材そのものの評価を引き上げていく必要があります。

その意味で、漆芸家としての私の役割は「漆をより価値あるものに進化させること」にあります。将来的には、「育てる人・掻く人・作る人」がそれぞれの役割を担い、つつ連携し、作ることと育てることを同時に続けていける仕組みを、奥久慈という地から少しずつ形にしていきたいと考えています。私も、作家としての仕事を通じて、県北地域の漆の発展に関わり続けていければと思っています。

5. おわりに

これまで見てきたように、県北地域で採取される漆は、その透明度の高さなどから、内外で高い評価を得ている。また、品種改良やクローン苗技術など、質を重視した生産戦略は、量的拡大を目指す他産地とは異なるアプローチであり、県北地域の漆の独自性を高める可能性を持っている。さらに、生産・木地・塗りの各工程が地域内に集積し、国際的に活躍する漆芸作家の定住も進みつつあるなど、原料産地と工芸文化が一体となった地域資源としての厚みが増している。

一方で、漆掻き職人の高齢化と後継者不足は深刻である。文化庁の方針を追い風に漆増産の機運が高まっているものの、植栽から漆液採取まで10年以上を要するという産業構造上の制約もある。担い手の確保・育成と中長期的な資源造成を一体的に進めるなど、経済

的な持続可能性を担保する仕組みづくりが求められている。

県北地域の漆産業は、文化財修理という公的需要、品質を評価する作家・問屋からの民間需要、そして品種改良や研究連携を通じた技術的な蓄積を備えており、今後の発展に向けた基盤は着実に整いつつある。この地域資源を次世代に引き継いでいくために、行政・産地・漆芸の各関係者が連携し、長期的な視点で産業基盤を支え続けることを期待したい。



乾漆蒔絵水盤「雲の容」
かたち
撮影：Satoshi Okui



蒔絵香合「ふゆとも 冬燈し」
ふゆとも
撮影：Satoshi Okui



おおでまりこうす
大手毬合子
撮影：Satoshi Okui

写真提供：室瀬祐